



- 体育会名: 関西学院大学体育会レスリング部
- 創部年: 1945年(昭和20年)
- 2025年度会員数: 18人(4年3人、3年3人、2年6人、1年6人)

- 同窓倶楽部名
- 同窓倶楽部通称: 関西学院大学体育会レスリング部 OB 会
- 設立年: 1982年(昭和57年)
- 会員数: 277人(男性261人、女性16人)

* 物故者含む

わが国のレスリングの歴史は1931(昭和6)年、早大にレスリング部が創設され、翌32年に大日本アマチュアレスリング協会が設立されたのが始まりである。同年には第10回ロサンゼルス五輪に参加した。その後、第2次世界大戦中は敵性スポーツと見做され、活動中止となってしまうが、終戦の45年に各大学でレスリングは復活することになった。

関学では進駐軍の柔道活動中止命令により、柔道部の一部の学生が進駐軍に柔道を教える傍ら、彼らからレスリングの技を吸収し、競技を始めた。それが同年10月のことで、関西におけるレスリングの草分けだった。創部時は大学4人、高商部9人、予科6人で、道場もなく図書館前の芝生で練習。米兵から貰った解説書をひもときながら、見様見真似で技の習得に励んだものだった。

46年、第1回国体が東西対抗戦として開催され、井川が西軍として出場、唯一の勝利をあげた。47年に関学、同志社、大阪機械高専の3校で関西学生リーグ戦がスタート、春・秋とも関学が優勝し、全日本選手権でもミドル級で河合が2位となった。49年に関西学生リーグに関大が参加したが大阪機械高専が脱落し、以降3大学時代が暫く続いた。

51年、オリンピック候補選手に田村、佐野、山崎、河合の4人が選出され、52年ヘルシンキ五輪に山崎が出場、ウェルター級で5位入賞を果たした。柔道、相撲の経験を生かし、レスリングを始めて丸3年で新たな技を身につけ、体格で劣る重量級での快挙だった。

54年には関西学生リーグに近大、八幡大が加入し5校となり、名称が西日本学生レスリング連盟に変更された。

57年には道場が改修された。前年の兵庫国体で使用されたスポンジマットとビニールキャ

ンバスを譲り受けて取替え、さらに道場内の柱を全部撤去。安全に練習できる環境ができたこともあり、部員の成績向上につながった。特に植木は国体バンタム級2位、全日本グレコローマンフェザー級で優勝し、58年には同級で全日本連覇を果たした。

当時、部員は全日本選手権、国体、西日本学生リーグ戦で好成績をおさめ、60年には日本レスリング協会のアメリカ派遣選手団に5人が選出され、全米を転戦した。61年の秋田国体では、植木が10年連続出場の表彰を受けるとともに、兵庫県選手団の旗手を務めた。

62年にはソ連・ルーマニア遠征団に小西、さらに第1回日韓親善試合に団長、監督、選手として11人が日本代表として遠征し、韓国各地を転戦しながら親睦を深めた。

47年にスタートした春・秋の関西学生リーグ戦では、63年までの17年間に優勝17度を遂げたものの、この年の春が最後の優勝となってしまった。また、体重別による西日本学生選手権が62年より5階級でスタートし、63年には4階級の優勝者を関学が占めた。

64年東京五輪で日本はレスリング競技で金メダル5個の輝かしい成績をあげたが、その選手団マネジャーとして、当部創設者の一人である井川が選ばれ活躍する日本チームの舞台裏で奮闘した。

67年から学内では授業料改訂をめぐる紛争がひろがり、各学部での卒業式の実施、そして機動隊の突入と学園紛争が続いた。69年8月には正常化され卒業式も実施されたが、この頃から新入部員が徐々に減少し、その後の部活動に大きな影響を与えることとなった。

68年からの3年間、菅沼が全日本学生、全日本選手権フェザー級で連続して入賞、国体では優勝を遂げた。菅沼は卒業後も79年まで国体に出場し、兵庫県の旗手、そして4度の3位入賞を果たし、息の長い選手活動を続けた。

69年、西日本学生リーグに大阪体育大が加盟し11校となり、2部制が採用されることになった。部員の減少が響き、西日本学生リーグでは、71年秋に2部に転落することになった。当時は高校からのレスリング経験者はゼロ。入学後に始めた部員で6階級9人のリーグ戦を戦っており、部員数及びその確保が1部復帰への前提であった。その後、1部復帰を目指して部員は努力を続け、74年春には1部復帰するものの、その後、1部・2部を行き来し、77年春に

2部に転落して以降、現在まで低迷している状況である。

リーグ戦の勝敗は、体重別階級での対戦の勝数を争う。全階級に選手をエントリーすることが求められるが、前述の部員不足により全階級エントリーが出来ない状況が続いている。この間部員は、練習の成果を個人戦で発揮することになり、西日本学生選手権での優勝や3位以内の成績、国体での入賞が主なものである。

現在の課題は、スポーツ推薦による入学の継続と、スポーツ経験者等の入部者確保により、部員の厚みを増すこと。同時に勝つための弛まぬ研鑽を指導陣及びOB会を含め一体となっ
て行うことと認識し、創部から60年代のような活力ある部に復活させることである。

また、レスリング競技層を厚くすべく、“ちびっこレスリング”が全国各地でクラブとして普及している。当部OBもその指導者として各地で汗をかいていることを付け加えたい。

(追記)

この原稿(初稿)が書かれた2013年9月は、IOC総会で2020年オリンピックが56年ぶりに東京で開催されることが決定し、日本中が歓喜に沸いた年であったが、同時にレスリングが大きな試練を乗り越えた年でもあった。

古代オリンピックからの競技でありながら、観る人にわかりやすく、感動を与えるための不断の努力を怠っているとの観点から、前年のIOC理事会で、2020年五輪より除外競技とされたのである。これに対してレスリング協会は競技方法変更など素早く対応、日本中から、また世界各国から五輪競技復活への力強い運動が盛り上がり、投票で五輪競技継続が決定した年でもあった。

レスリング部 部史 編集担当者 霜山次男

(S49 商学部)